有田焼っていつから？

山形市に出店した折の舘林玄次さんの店先（舘林典子さん提供）

「有田焼」って何だろうか、あるいはその定義について考えたことがありますか。現代のわたしたちにとって、あまりにも当たり前のことで、何をいまさらという方があるかもしれません。広辞苑によれば「佐賀県の有田を中心とする一帯から産する磁器」とあって、さらに「伊万里港から積み出したので伊万里焼ともいう」とあります。「有田焼」という言葉が歴史の中に登場するのは、元禄元年（1688）のこと、『鹿島藩日記』に次のように記されています。

水口（現在の滋賀県）城主加藤佐渡守様へ伏見より御飛脚、有島七左衛門を以て、香炉有田焼皿等遣わされ候ところ、御飛脚へ金百疋、右家来へ鳥目五百文下され候　（江戸藩邸日記）

そのほかにも宝永年間（1704～1711）、寛政９年（1797）などの資料にみることができます。しかし、一般的には伊万里焼で全国的に名を馳せたことは誰もが認めるところです。では、現在のように伊万里焼から有田焼へと呼び方がかわったのはいつでしょうか。

明治４年（1871）に日本を出発した岩倉使節団が、各国で見聞したことを詳細に綴った『特命全権大使米欧回覧実記』の中に、同６年１月パリ滞在中に見学したセーブル窯と日本磁器を比較しての一文があります。この記録は佐賀藩士であった久米邦武を中心にまとめられたもので、次のように記しています。

其術ヲ肥前ノ奥、有田ニ伝ヘ、此地ニ「カオリン」石礦ヲ発見シ、之ヲ開採シテ磁器ヲ製シ出セルヲ、古伊万里焼トハ謂ナリ　（第44巻　巴黎府ノ記三）

また、明治９年（1876）米国・フィラデルフィア万国博覧会では「有田磁器」の名称とともに「新古陶磁器類聚」として有田焼、大河内焼、三河内焼の名が見えますが、翌10年東京・上野公園で開催された第一回内国勧業博覧会では瀬戸焼、薩摩焼などと並んで伊万里焼とあります。時代が明治となっても、なかなか有田焼という名称は定着しなかったと思われます。考えられるのは明治30年（1897）の鉄道敷設以後、輸送形態が船から貨車へとかわっていったころではないかと推測されます。明治44年（1911）１月発行の『西肥日報』に「有田繁盛記」という記事があり、「有田焼」の定義が記されています。そこには有田焼の産地として郡ごとに次のような町村名があります。

▲西松浦郡（伊万里町・有田町・有田村・曲川村・大川内村・松浦村・南波多村・大山村）
▲藤津郡（久間村・五丁田村・西嬉野村・吉田村・古枝村・塩田村・八本木村）
▲杵島郡（西川登村・橘村・武内村）
▲三養基郡（北茂安村）

神埼郡の尾崎焼、東松浦郡の唐津焼、西松浦郡の大河内焼などは有田焼から除いています。生産量や販売量などは西松浦郡が主であって、有田町を中心として各村々が囲む形となり、有田焼の名もここに胚胎（物事が発生する始まり）し、有田焼と言えば有田町に帰着されるようになっているとあります。

このころから次第に有田町を中心に産出されるやきものに「有田焼」の名称が定着しつつあるようですが、ここで問題なのは消費者側と生産者・販売者側が同じ認識であったかどうかということです。例えば、写真は大正から昭和にかけてと思われるもので、戸杓の商人、舘林玄次さんが山形市に出店した時の様子です。看板や幕には「肥前焼、一名伊万里焼」の窯元出張所とあって、有田焼の名はどこにもありません。

有田焼という名称がいつごろから定着してきたのかは、研究者によってさまざまですが、もう一度いろんな角度から考え直す必要がありそうです。（尾崎葉子）

めも

有田焼の名称については「有田町史陶業編Ⅰ」にあります。「西肥日報」の原本は佐賀県立図書館、複写したものを当館に所蔵しています。明治19年（1886）のちの大隈内閣で逓信・大蔵の各大臣を歴任した武富時敏によって「肥筑日報」が発行され、後「西肥日報」と改称されました。明治44年ごろの主幹は西峯火という人物だったといわれます。

万博と内国博の資料はそれぞれ「明治期万国博覧会美術品出品目録」、「内国勧業博覧会美術品出品目録」が東京国立文化財研究所から出版されています。

季刊
皿山春
No. 57
有田町歴史民俗資料館・館報

シリーズ　ザ・陶器市

陶器市物語

その５

～100回の歩み～

いよいよ今年、陶器市は１００回を迎えます。前回の座談会では関係者の苦労の数々を紹介しました。改めて先人の知恵と情熱に畏敬の念を覚えます。このように有田だけの年中行事にとどまらず、今や日本を代表する初夏の行事に定着した陶器市ですが、100回目をさらなる200回への出発地点と考えて、新たなスタートになることを願っています。今回は終戦後から現在までの動きを紹介します。

戦後の復活

やきもの作りは平和産業です。100年以上続いた歴史の中で７回の中断は、いずれも戦争のためでした。最初は明治37年の日露戦争、そして昭和17年から22年までの６年間は第二次世界大戦によるものでした。

戦時中は政府によって価格統制が行われ、陶器市の売り物である値引きができなくなり、17年には遂に中止へと追い込まれました。20年8月15日、日本の無条件降伏で戦争は終わりました。しかし、疲弊しきった社会はすぐには回復できません。兵隊としてかり出された職人の帰郷は未だ完全ではなく、原料の入手もままなりません。疲れ切った有田の様子が思い浮かびます。終戦後から陶器市再開までは２年の時間を要しました。

この間、一水会会員の田中太郎氏（大樽）が独自で絵画を主体とした美術展を開いていましたが、町の中にやっと陶器市・品評会を復活しようという機運が持ち上がり、23年5月1日に復活第１回と銘打って幕開けとなりました。

戦前は品評会を西松浦郡陶磁器同業組合が、陶器市を陶器市協賛会が担当していました。しかし、同業組合は14年に解散していたので、設立間もない有田商工会議所が担当することになりました。陶器市は常任委員が担当することになり、そのメンバーは中村潔、池田忠一、神近享一、会議所の岸川士朗、森賢一、今里正男、丸肥組合の岡田常七、川本一男の方々でした。

昭和31年の陶器市反省会。
池田忠一さん、神近享一さんらの顔がみえる。

新たな悩み

復活後の品評会は、それまでの部門別による審査（製造・錦付・販売）から、製品そのものを３つの種目（第１部美術工芸・第２部産業陶磁器・第３部陶工、学生、個人競技）に分けて行うようになりました。しかし、戦前のような賑わいを取り戻すには至らず、常任委員は出品勧誘に走り回りました。

25年に勃発した朝鮮動乱の軍需景気で日本全体が活気づき、それに伴い消費者層の旺盛な購買意欲が高まり、焼き物愛好ブームに乗じて陶器市も次第に賑やかさを増していきました。また、戦前にはなかった濃尾地方の製品の「たたき屋」が登場しました。おもしろい口上を唱えながら焼き物を売る店が町外から参加したことで、客を引き寄せた反面、その製品は「有田焼」でないことをＰＲしなくてはなりませんでした。来市者も年を追うごとに増えつづけ、20年代は20万人、30年代は30万人と右肩上がりの成長を続けました。しかし、同時に困ったこともおこりました。まず、人口の何十倍という人が有田を訪れるため、トイレが足りない。苦肉の策で、トイレを貸してくれる民家の玄関に、目印としてバラの花を置いたこともありました。

さらに、車社会の到来で駐車場不足があります。陶器市臨時列車や貸し切りバスの運行を進め、48年にはバイパスも開通しましたが社会の流れには追いつくことができませんでした。これらの問題は抜本的な解決策が未だ不十分で、今後も陶器市の課題として、次世代へ引き継ぐことになりそうです。

これまで５回のシリーズで品評会・陶器市の歴史を紹介しました。100回の歴史は動乱の連続でもありました。ここで紹介できた先人はその一部です。有田に関わった全ての人に、何らかの形で陶器市の思い出があると思います。町民一人ひとりが現在、そして未来の陶器市の歴史を担っているという認識を持つことで、新しい町づくりも可能だと思います。

企画展「100回目の有田陶器市」開催

今年度の企画展「１００回目の有田陶器市」を開催します。明治29年の第１回有田五二会陶磁器品評会から始まる歴史を、受賞表彰状や銀杯・木杯、古写真などの資料で紹介します。

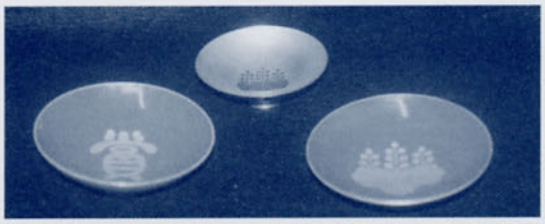
残念ながら、品評会の受賞作品は現存するものが少なく、作品を紹介することはできません。また、今まで99回の受賞者や背景などは資料としてまとまったものがなく、陶器市の全容はほとんどわからないというのが実情でした。

今回の企画展では、99回の受賞者や受賞作品、それぞれに関わった人々やその時代に抱えた問題などを明らかにし、先人の努力や熱意を紹介します。

・期　　間　　平成15年３月21日（金）～
　　５月12日（日）

・開館時間　　午前９時～午後４時半

・場　　所　　有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館



受賞者に贈られた銀杯・木杯（池田トヨさん所蔵）

大正10年「腹巻丹丘日誌」より

古文書を読んでみませんか

当館では、初心者を対象に古文書教室を開催しています。テキストは享保16年（1731）に記された「皿山雀」です。有田の名所・旧跡から、皿山人の気質の分析まで、さながら「ミニ有田百科辞典」のような書物です。興味のある方は当館まで申し込んでください。

・日　時　　毎月１回　第３月曜日
　　１時30分から３時まで

※講師の都合で日程が変更になる場合もあります。

・講師　蒲地　豊先生

春です、お雛さま登場

当館ではこの季節になると、毎年お雛さまを展示しています。昭和の初めごろに作られたもので、内裏や三人官女、随臣などとともに、道具類も歴史を感じさせるものです。また、去年からは有田町の至るところで、お雛さまを見ることができます。

これは「べんじゃら祭り実行委員会」という町づくり団体が、各家にあるお雛さまを飾って有田の町を訪れる人々を迎えようと呼びかけたことから始まりました。焼き物の町らしく磁器製の内裏雛や、中には焼き物の碗や皿など、ミニチュアの道具類などがショーウインドを飾っています。

「べんじゃら祭り実行委員会」というのは、各商店街のメンバーや有田町役場などの有志で構成された会です。毎月一回夜に会合を行い、夜更けまで町づくりについて談論風発。これまで「碗琴」の再発見、昨年大晦日の陶山神社灯明飾りなど、着実に有田の町に根づいた活動が続けられています。

これから気候も穏やかになります。散策を兼ねて各家のお雛さま見物はいかがでしょうか。

資料の寄贈

・千歯こぎ、箕、鍬	赤　坂　本山成信様
・軍服	上幸平　吉武要次様
・書籍（俳諧関係）	本幸平　岸川タヨ様

ありがとうございました

ンペジャラ

郵政公社発足第１号の「ふるさと切手」は“有田”

４月１日発足の郵政公社が発売する「ふるさと切手」のうち、九州管内では「有田」で決まりそうです。いくつかの候補が挙がっていましたが、有田陶磁美術館所蔵の「染付有田皿山職人尽し絵図大皿」と「色絵狛犬」に絞り込んで検討中と聞いております。３月中に決定し、４月には九州管内の郵便局は勿論、全国の主要郵便局で発売の運びとなります。

有田郵便局　渡辺局長の話によれば、「ふるさと切手」を決定するまで地元のご苦労も多いとのことで、今回のように一発で決定するのは、きわめて珍しいそうです。有田町にとって本当に有り難いことです。

皆さんもご存知のように、職人尽しの絵皿は江戸時代の皿山の生産工程をこまかく活写した約60センチの大皿です。昭和57年（1982）に県重要文化財の指定を受けました。

一方、切手の中央に収まる狛犬は延宝年間（1675年前後）のものと推定され、初期赤絵の濃厚な色調で、荒々しい形相のうちにも愛嬌を感じさせる造形の美しさがあります。この狛犬は泉山・弁天社に奉納されていたもので、昭和33年（1958）に県重要文化財の指定を受けました。よく見ると狛犬の左足でクス玉を押さえています。クス玉は５月５日端午の節句に邪気を払い、元気を呼び込む縁起物です。

私達の住む「有田」には、江戸時代より先人が苦労に苦労を重ねて築きあげた「やきもの」の伝統があります。このたび発売される「ふるさと切手」は先人の努力の象徴ともいえます。

間もなく「第100回有田陶器市」。これは業者だけのものではありません。有田で暮らす町民が先祖の努力に感謝し、町民一人ひとりが主役となって来訪者を温かく迎える一大行事です。

この一大行事にふさわしい「ふるさと切手　有田」を皆が利用し、自然の美しい有田から情報発信したいものです。

今年の陶器市期間中は有田陶磁美術館入り口で「ふるさと切手」の発売と共に、記念スタンプの会が予定されているようです。同時に有田陶磁美術館で「切手展」も予定しております。有田町ご来訪者のご案内旁どうぞお出かけください。　（久富桃太郎）

季　刊『皿　山』

通巻57号（平成15年３月１日）
編集・発行　有田町歴史民俗資料館

〒844-0001　佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678　FAX0955-43-4185